閃

ケニーD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
閃

【Ｎコード】
Ｎ１９５７ＢＡ

【作者名】
ケニーＤ

【あらすじ】
軟弱な者には哀れな死を。すべての人には拳銃が必要なんだ。その光が人類の道を照らし続ける。

1（前書き）

三部作の二です。

1

幾重にも傷つけられたあの細い手首を見ては笑い、机の上に置かれてある、睡眠薬だの向精神薬だのを見て、僕はもっと笑う。あいつはまたピアスの穴が増えた。全部で六箇所だ。これからも増えていくのだろうか。どうせなら、ちびちび開けずに、大きな穴をひとつ、頭に開けて死んでしまえばいいのに。僕はその穴から、新しい世界が見えるか覗いてやろう。あいつは深海に憧れながら、いまでも浅瀬をさまよっている臆病で鈍間な亀だ。死にたいのなら、さっさと死ねばいいのに。

涼しかった夏が十日前に終わり、一面の世界が秋色の訪れを歓迎し始めた。

午後、窓を閉め切った部屋にこもり続け、秋の息吹さえ感じていないだろう由菜の元へ僕は、愛車のＳＲ４００で向かった。

バイクに乗るなら、本当は春がいい。命の芽生えを見られるし、世界が鮮やかな色で満たされるからだ。

僕の住んでいるマンションから由菜の居場所までは、のんびりと走って二十分くらいで到達する。車が多いときは、スムースに進めなくて苛々させられることもあるけれど、ほとんどは流れる景色を楽しむことができた。

由菜のマンション前にバイクを止め、青空の絵に一面の星が描かれているビンテージもののジェットヘルメットをはずし、頭を振って髪型を自然体に戻す。自然体にするはずなのに、ちょっとしたハネが気になるのはなぜだろう。手ぐしで簡単に直し、僕はエレベーターで六階に向かった。

いつからか、由菜がわざと鍵を閉めなくなったドアを開け、いつも、「なんだ、まだ死んでなかったのか」という挨拶で表情をうかがう。由菜は返事もせず、黙ってうなずくのだった。

今日、ドアをくぐると、由菜が首を吊って天井からぶら下がっていた。一瞬は驚いたけれど、そうか、ようやく死んだんだな、という無音の感慨と、あとはなんだろう、今までよくがんばった、という賞賛と、だれにも死ぬことを伝えずに迎えられた、最期に対するお疲れ様の一言をあげたくなった。ほんとうなら、顔を抱きしめてやりたかったけれど、少し高い位置にあったのでやめた。

死体がきれいなところを見ると、どうやら僕がここにくる時間にあわせて死んだらしかった。血を流さず、一瞬だけでも美しく死にたくて、古風なこの方法を選んだのだろうか。

ふと、小さなテーブルの上に遺書のようなものを見つけたので、目を通さず僕は破いた。書かれてある文面はだいたい想像がつく。欠片をジーンズのポケットにしまい、嘆息をひとつ漏らして警察を呼ぶ。こういうのはとても面倒で仕方がない。

付き合って半年ほど。愛していたのかはわからない。ただ、死にたいのだろうな、と思える行為が何度もあったから、そうなら死ねばいいじゃないか、と言いつづけていただけだ。もし、ほんとうは死にたくなかったなどとあの世で言おうものなら、僕は鸚鵡を飼いならし、「おまえは大バカだ」と伝えさせるに違いない。

警察がくる前に、由菜の元から左耳のピアスをひとつだけはずし、自分の胸ポケットに入れた。前かがみになったときに落とすかもしれないけれど、それならそれでもかまわず、ただ、ほんとうに小さな重さを胸元で感じたかっただけなのだ。

それから、警官がきて、そのあとにやってきた刑事にいろいろと訊かれ、すぐにうんざりできた。冷然としていたからか、ほんの少し、疑いの目で見られもした。でも、自殺したのは事実なのだから仕方がない。調べればすぐにわかることだし、だから、僕は大人の対応を心がけた。

由菜の親には僕がいちおう連絡をやった。テレビドラマよろしく、なぜか、決まったように「嘘でしょ？」と聞いてきた。疑いたくなる気持ちはわかるのだけれど、地球上のどこかでは、「いよっ、待

ってました」という返事があってもいいのでは、と思う。その声があれば、どちらにせよ花道を通るわけだし、あの世にだって行きやすそうなものじゃないか。たとえ不謹慎でも。いや、なにが不謹慎なものか。なにより、僕自身が最初に思っていた賞賛じゃないか――。

やがて来る、会ったこともない由菜の親が悲憤に崩れるだろうことは容易に想像でき、だから僕は、一番若そうな刑事に、もう帰ってもいいかどうかを聞いた。刑事は、困ったような、自分には決めかねるといったような表情を露骨に見せ、すぐにはっとして、「ああ、でもですね、いちおう発見者だからいてもらわないと困りますよ」と言った。歳もそこそこ近そうに見えたから、きっと理解してくれると思ってわざわざこの刑事を選んだのに、公僕というのは、父を含め、どいつもこいつも堅苦しいものなのだろうか。しかし、これも彼らの仕事の一部なのだ。なら、僕は由菜を見守ろう。刑事たちが変な気を起こしたり、侮辱するような真似をしたりしたそのときは、無表情なこいつらすべてに、少しの表情をもたせる意味でも、鉄拳をお見舞いしてやる。ああ、なら僕自身にも一発、必要だった。

行われている作業は、人形の搬入か、もしくは造形の見積もりにしか見えなかった。この死体をいったいいくらで買ってくれるのだろう。この空間に漂うのが、これほど単調な音楽なら、親の悲哀はきっと、まどろむ聴衆を目覚めさせるいいアクセントになるだろう。

ここには、命がひとつなくなったという実感が、微塵もなかった。

2

座ったり、歩いたり、空を見たり……自分がなにをしたいのか、本当に分からなくなってきた。いい加減、帰ったほうがいいと思い、バイクを走らせると、街の明かりはすぐに遠のいて、それから林道に入ると、しばらくうねりと空より暗い闇が続いた。ガードレールの向こうすべてには、黒いブナが雑然と直立し、名も知らぬ、生い茂る草が土や石と競うようにして、投げられる明かりの中で子供のように木々にまとわりついている。あと少しもすれば、木々は色づくだろう。

静かな道。ここは、昼夜を問わず、ほんとうに、たまにしか車とすれ違わなくて、こういう寂しげな場所で対向車に出会うと、夜ならなおさら、心から安堵できる。そして、ライトが車を照らすと、ほんの一瞬だけ車内の人の顔がうかがえるのだけれど、たいていはそのどれもが無表情で、無機質な車と見事に一体化しているように思えた。今すれ違った車のドライバーも同じように無表情で、まるで死人だった。生きているのに死んでいる。ああ、由菜はどれほど立派だったのだろう、僕はなんとなしにそう思ったけれど、実際のところ、その感情は闇の戯れに触れてのまやかしのはずで、本心ではない。なぜなら、由菜はそもそも、一部には、かまって欲しくて自傷していたはずで、そのことに関して僕は、非常に辛辣な言葉を与え続けていたのだから。

僕は帰る前に由菜のマンションに寄ろうかと考えたけれど、通夜だとか葬儀だとか、僕はもう関わらないほうがいいと判断し、行くのをやめた。彼女の母親のために見せる涙もなかった。

マンションに戻り、自分の部屋を駐輪場から眺めると、白い明かりがカーテンから漏れていた。弟が二日ぶりに帰ってきているようだった。ドアを開け、ヘルメットを靴箱の上に置く。リビングに行き、ただいま、と言ってようやく、おかえり、仕事決まった、とい

う返事があった。
いつも、歳がひとつ下の弟は愛想無しに話す。視線を僕に向けたことなんて、あったかどうかも忘れるほどで、どことなく弟から虚無感を感じる。でも、いちおう会話がある程度は成立するし、この住処での雑務もこなしているので、最近は、追い出そうと思ったこともない。家賃の八万円は、弟が掃除、洗濯をするというのを条件に、僕が払い続けていた。
「仕事なに？」
「オヤジの呼び込み」
「キャバクラのやつ？」
うん、とうなずいた。
「じゃあ、これから家賃は折半だぞ。掃除洗濯は当番制」
「ここのことは俺がやるから、家賃はしばらく兄ちゃんが払っててよ」
「あのな、今日は疲れてるんだよ。これ以上わずらわしい思いをさせないでくれ」
「ああそう、わかったよ」
猫があくびをするような気だるさで返事をする。
「折半だからな！」
僕はそう言ってから自分の部屋へ行き、ベッドに寝転んだ。身体をうんと伸ばしたとき、お腹が刺激されたからか、きゅ、と小さく鳴った。そういえば、朝にパンをかじってからは、なにも食べていなかった。でも、いちど寝転ぶと、動くのも億劫になる。何気なく胸に腕を置くと、由菜のピアスの形に気づいた。ポケットからとり、目の前に掲げて形をよく確認した。小さな、ハート型をした銀色のピアスだった。そして、そのときに、由菜は人のやさしさに馬鹿らしくも触れたかったのだろうな、となんとなしに思い、その小さな理解でもって、僕は身体を起こし、ピアスを窓から放り投げた。きらめきは音もなく闇に消え、これで完全に終わったのだと思った。
半年間、僕は由菜をほとんど見ていなかったように思う。友人の

弘樹にどうしてもと頭を下げられ、紹介されて、断ることができずに友達から始め、やがてつきあった。弘樹は僕に由菜の面倒を見させたかったのかもしれない、と最初は思っていたのだけれど、どうやら、女友達に頼まれての紹介らしかった。

近くにいればほんの少しだけ情もわく。でも、由菜の虚空のような顔を見ていると、いつからか、あいつの本音がそうでなくとも、やはり死ぬのが由菜の幸せなのだろうと思うようになった。笑顔よりも由菜の破滅を願った。それは、あいつ自身が虚妄の中で一番望んでいたことだ。少しまえ、つきあって初めて喧嘩をした。そのとき、由菜が今までになく卑屈を装ったので、「おまえは構ってもらいたいがために血を流したり、薄弱を装う姑息で軟弱な人間だ。盲目的に医者を信じるくせに、ひとたび問題がおこれば先生が悪い、薬が悪い、環境が悪いと言って、自分の弱さに立ち向かおうとせず、行動もせず、これにかけては犬並みの嗅覚で同じような仲間を見つけて傷を舐めあい、馴れ合うことしかできない邪魔でみすぼらしい倒木だ！　おまえは僕に同じものを感じたのかもしれないけれど、言っておく。その気になれば、僕はだれにも言わず、たった独りで瞬間に、自分自身の命を絶つことができるんだ！　僕はいつか、拳銃を手に入れるよ。悔しかったら、おまえも独りで死んで見せろ。それができたそのときに、僕はおまえを抱きしめてやる」というようなことを言った。それから数日経ち、由菜は自殺したのだった。

窓の向こうに広がるただ黒いだけの空を眺めながら、ふと、いつまでもこの夜は明けない気がした。星は都合よく流れず、ただ虚しさだけが僕の中にあった。

だれだったか、宗教は自殺願望のある者を救うというようなことを言っていた。さんざん探した挙句、カバンの中や、机の中を探しても見つからない神様が、どうやら救ってくれるということなのだろうけれど、宗教は気休めにもならない。むしろ胡散臭いものじゃないか。布教する信者でさえ愛を知らず、敬虔な者でも人を憎み、だれもが合わぬ者に対して排他的に疎外する。そして仲間同士で哂

うのだ。人はすべて病んでいる。その病魔がとり去られることなどきっとない。人はなにを信じようとも変わらない。愛や秩序などどこにもなく、あるのは憎悪と混沌のみじゃないか。あの人格者が、人のために流す涙のなんと破廉恥なことか。

風が、雨のにおいを運んできた。僕は弘樹に電話しようと思ったけれど、考えてみれば、話すことなどなにもなかった。由菜が死んだと言ったら驚くだろう。場合によっては僕が責められるだろう。やはり、話すことはひとつもない。それは、とても勝手なことだけれど、いまの僕がだれの理解も必要としていないからかもしれなかった。

しばらく目を閉じて、考えるのが嫌になって煙草を吸い、リビングに戻った。弟はテレビから聞こえる笑いを追うようにして、けらけらと真似をしていた。

「なあ、なにか食べるものなかったっけ」

「お菓子があったけど食べたからもうない」

ため息をひとつして時計を見る。深夜二時だ。僕は、二十四時間あいている定食屋に行こうと思い、弟を誘った。

「明日からまたバイトだろ？　寝たほうがいいんじゃねえの」

弟にしては珍しい気遣いだった。

「働く気分じゃないし、休むな、きっと。それに、来月からは家賃が半分ずつになるわけだし、少しバイトを減らそうと思う。工場ってのは、空気も人間も機械のうなる音も、すべて毒なんだよ。みんながみんな吐きそうな青い顔をして働いてるのさ。一年もいれば、太陽でもってしても、解毒なんてできやしなくなる」

「ふうん、どうでもいいけど。ま、飯はおごってくれるのなら行くよ」と言って、またテレビを見ながらけらけらと笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1957ba/

閃

2012年1月10日21時51分発行